

現代の医療でも難病とされているパーキンソン病。高齢者に患者数が多く、今後も増加が予想されています。今回はパーキンソン病についてご紹介します。

パーキンソン病とは

(1) パーキンソン病とは

パーキンソン病は体がふるえたり、動作が緩慢になったり、倒れやすくなるなど右表のような症状が多くみられます。主に40～70才ぐらいで発症しますが、20～30才代で発症する人もいます。病名はこの症例をはじめて報告した、ジェームズ・パーキンソン氏の名前に由来するものです。発症すると、症状は進行し悪化する傾向があります。進行の早さは患者それぞれで異なりますが、概ね発病後7～8年で寝たきりの状態となることが多いようです。

●運動症状

静止時振戦 (せいじしんせん)	力を抜いている状態で1秒間に4～5回程度震えている。
筋強剛 (きんきょうこう)	関節の曲げ伸ばしがしにくい、抵抗がある、こわばる。
無動・寡動	動作が遅くなる、動きが無くなる。顔の表情が乏しくなる。
姿勢反射障害	バランスを崩して倒れやすくなる。
その他	足がすくむ(歩き出しにくい)。小刻みな歩行となる。

●非運動症状

自律神経症状	便秘、燕下障害、排尿障害など。
精神症状	うつ症状、認知障害など。

(2) その原因は

脳の中脳にある黒質という部分には、神経が正常に動くために必要なドパミンという物質を作り出す細胞があります。パーキンソン病では、この細胞が徐々に死滅していくことで、発症すると考えられています。なぜ細胞が死滅していくかについては、未だ解明されていません。また、パーキンソン病患者全体の約5%は遺伝が関係し、血縁者から引き継いだ遺伝子の変異が発病にかかわっていることも分かってきました(家族性パーキンソン病)。

(3) 命にかかわる病気ではありませんが・・・

パーキンソン病は伝染性はなく、またパーキンソン病が直接の原因となって亡くなることはありません。しかし、運動機能が衰えるため、転倒などの事故が起こりやすくなります。また、食事中に食べ物を気管に入れて肺炎(誤嚥性肺炎)を起こす場合があります。

早期発見、早期治療を

(1) パーキンソン病の診断

前章のような症状があればパーキンソン病が疑われますが、このような症状はパーキンソン病以外でもみられます。そのために診断には①症状とその変化の確認、②服用中の薬剤による影響の確認、③CTやMRIによる脳の画像診断(パーキンソン病は画像の特異性は無いため、パーキンソン病以外の病気について調べる目的)を行います。さらに④パーキンソン病治療薬の投薬を試みて、その反応を調べることによって診断を行ないます。

(2) 主な治療法

①薬物療法

パーキンソン病の主な治療方法は内服薬の使用です。しかし正常な機能を回復するまでの効果は得られていません。ただし、放置すると症状はますます悪化していきますので、早期の治療が必要です。

②外科手術

薬物療法を継続していても、次第に効果が薄れてきて、日常生活に支障をきたすようになることがあります。その場合の治療法として、外科手術による「脳深部電気刺激術(DBS手術)」があります。これは、脳の視床下核に電極を埋め込み、継続的に電気で刺激することによって、震えなどの運動症状を改善する手術法です。

(3) 研究中的治療法

パーキンソン病の治療法を開発するために、試験的に遺伝子治療が2007年より日本でも行われています。これは人体に無害なウイルスが媒介となって、脳内にドパミンの合成を促す遺伝子を送り込む治療法です。治療法として確立するにはまだ研究や検証が必要です。その他、脳内への幹細胞移植によって、ドパミンを作り出す細胞を再生する治療法も研究中です。



《皆様の安心と安全のブレイントラスト(専門顧問グループ)》

株式会社ヤシロエージェンシーリミテッド 担当：八城一浩

〒107-0052 東京都港区赤坂3-1-2 TEL:03-3582-4511